『しつの歌』「しつの歌の歌返し」のあり方

まずは「しつの歌」「しつの歌の歌返し」の両書におけるあり方の整理から始めること。

古事記においては、雄略記にまず雄略天皇と引田部赤猪子の求婚物語の段にある二人の贈答歌四首の段が春日緑拾葉が天皇に献じた一首を、此の四の歌は志都歌詠をとる。さらに「志都歌詠の段で春日緑拾葉が天皇に献じた一首」や、此の四の歌は志都歌詠をとる。さらに「志都歌詠の段で春日緑拾葉が天皇に献じた一首」を故にこの段落に於て「しつの歌」のあり方を示す。「しつの歌」のあり方を示す。「しつの歌」のあり方を示す。「しつの歌」のあり方を示す。「しつの歌」のあり方を示す。「しつの歌」のあり方を示す。「しつの歌」のあり方を示す。「しつの歌」のあり方を示す。「しつの歌」のあり方を示す。
神
余
き
に
諸
御
そ
し
す
や
さ
垣
い
ら
志
都
の
類
が
の
歌
た
つ
も
み
ろ
歌
都
茲
の
歌
る
首
と
首
に
で
琴
を
会
う
に
で
あ
た
で
宮廷の儀式、行事は或は志都歌を中心に行われて来たり面きを推測出来る訳である。とま
で言及している。
しかもこの「志都歌」と「志都歌の歌返」は、古事記でも
計五百首「志都歌の歌返」が二所計七首、両者を「志都歌」
の類としてまとめるが結局四カ所二首もみえるのは突出
して多い。ここからはそれら「志都歌」の類が当時の宮廷
歌中あっても重要的ものとして行われていたことが窺われる。

古事記には歌名が計一六種、歌名を有する歌が計三十七首
もみえる。それらは、古事記編纂当時、音楽を管掌する
役所「楽府」（神武即位前紀、持統紀元年正月にみえる。令制
における「雅楽寮」が伝習・管理していたもので、宮廷行事
で実際に行われていたものが含まれていると考えられる。一
種のうちで「夷振・片歌」はそれぞれ「カ所一首
ずつ」しかみえない。他は「思国歌」・「酒楽の歌」・「夷振の上
歌」・「諸歌」が一首ずつ、「天田振」・「天語歌」が三首ずつ。

神楽が四首あるが、やはりそれぞれ「カ所にしかみ
えない。」そうした中で、以上に拝げたように「志都歌」が二カ所
のうちにあるようなが、やはりそれぞれ「カ所にしかみ
れない。」

大体のやかや「志都歌」は雄略天皇のゆかり、「志都歌の歌返」は仁德
天皇のゆかりとみられるかも知れぬこと、大変な一点である。

ただし、志都歌」と「志都歌の歌返」は、その名が両者の
深い関係を示しているにもかかわらず、古事記においては以
上ののように別々の天皇記にあって交差していない。この点を
どう見るかが一課題である。

他方、琴楽譜では、「十一月節」（新嘗会）に行われたとされ
の歌群十二曲の最初に「志都歌」として、

芳に
築くや
玉垣
斎（き）余
誰にかよらむ
神
琴歌編纂の歌は歌曲に取り入れられ、それは仁徳天皇が八田皇女を妃として納れたが皇后の嫉妬を招いていた。同歌は宮中で数多く演奏され、その旋律は当時の社会を象徴していた。

琴歌・縁記」とともに載せる。これは縁記の赤猪子の歌⑦と同歌であり、縁記にも雄略天皇に対し赤猪子が詠んだとする縁記を「此の縁記」と歌と異なるが、否定し、琴歌編纂者自身はこの雄略天皇に対して赤猪子が詠んだとする縁記を「此の縁記」と歌と異なるなり」と肯定している。以前に検討したように、「先の方の縁記は琴歌編纂の時代には再異説も説かれていったという事情である。よって縁記としては古くから雄略天皇に対して赤猪子が詠んだ歌として伝えられていったという点がまずは重視される。

また「薫都歌」の次に、「歌返」として、弥富国の淡路の三原の篤さを根拠にした数々の詩を次々と歌う。「歌返」は古事記の歌そのものである。「歌返」は歌詞は変わらぬ。縁記も同じではないが、ただ皇后の仁徳天皇と八田女をめぐる嫉妬物語を背景としている点は古事記と合して、しかも琴歌編纂の「薫都歌」と「歌返」は、二曲が続いていても、それは雄略天皇が八田皇女を妃として納れたが皇后の嫉妬を招いていたことによるものである。縁記も同じではないが、ただ皇后の仁徳天皇と八田女をめぐる嫉妬物語を背景としている点は古事記と合して、しかも琴歌編纂の「薫都歌」と「歌返」は、二曲が続いていても、それは雄略天皇が八田皇女を妃として納れたが皇后の嫉妬を招いていたことによるものである。
応していることが明確である。前半部の拍子数は「都歌」は少なくゆっくりとして、「歌返」は多くリズミカルである。全体として「都歌に対する歌返は、前曲の一部の旋律を後曲の一部の旋律として、拍子を重ねて表す歌謡の一形式」といいながら、「歌返」の名もそうした音楽的な意味を含んで「ある歌に歌い返す歌」または「歌に応する歌」の意味なのであろう。このように琴歌譜においては「都歌」の意

象を示さない。一種の組曲の関係として存在する。「歌返」は常に連続するばかりでなく音楽性においても

両者の関係について積極的に論じられてこなかった一因はここにあると思われる。けれども、以上の整理の中にも関係解

読の糸口はもう示されている。

今日は新嘗の直後の豊栄宮に住居を設え、宮中に入るにあたって酒宴（新嘗会）であることが明確である。内裏

式（弘仁十二年八月二十三日）の「十一月新嘗会式」の宣命

に、

以て黒き白き御酒を赤丹の稲に食ふらき罷れとして
古に纂に事府がで「わるな返に」という、公的な酒宴を意味する。'

ゆは内儀式によると、新嘗会は供饌・触行・吉野国七による歌舞・楽・舞と进行する。そのプログラムの中の一つ、「大歌舞新冠の舞・五節の舞」、「雅楽法による立歌・宜運・賜禄及び行進する」。そして「高橋扶理」から、「大舞唄・清風・九曲の小歌」で歌われたのが琴歌舞所の歌詞にあたる。琴歌舞所による歌舞・楽・舞は最初に二つの大歌として、組曲の体をなして歌われたのである。

一方、古事記の「志都歌」や、古事記の戯曲は古事記編纂時代に楽府で管掌され、やはり何らかの宮廷行事で行われていたものとみられるが、ではその宮廷行事とはどのようなものか。

手がかりは物語中の「豊楽」の語にある。雄略記の⑤は物語中において歌の場を「豊楽」としている。すなわち天皇、長谷百枝桜の下に坐まして、「豊楽きしめし時」に、「天語歌」三首（一〇三）古事記通の歌号は土橋舞編「古代歌論集」（日本古典文学大系）による。以下同じが歌われ、また同じ「豊楽」の日に、天皇の「宇峻歌」（一〇四）と袁応比売の「志都歌」を歌う。新舞屋に百足桜が枝は……とあり、「一〇一の歌詞りに生び立てる。葉広ゆる桜花……とある。ことによってこの時の「豊楽」が新嘗祭にともなうそれであったことがわかる。「大舞を謳える内容の⑤は新嘗祭で歌われたのである。この際、しかしそれは物語中での酒宴で歌われたのである。この歌やその物語が、たんに物語を通じての歌号としての歌詞りに生び立てる。葉広ゆる桜花……とある。}}
おそらくその歌謡の起源は、西郷のお古さを取ってみそれとして描かれているのだ。益田勝実に「天謡」三首について、その歌謡名の語義にこだわって自らを求めていく従来説に対し、古事記でこれらがとやのあかりの歌謡とされていることをこそ重視すべく、逆に読んでいる、「とよのあかり」の時歌がつけて伝承されてきた歌謡が古事記に取られたのだ、としている。

この「天謡歌」宇岐歌を聴く一大音楽の「豊楽」は、雄略記の終わりにあって天皇崇仰の意図をもって描かれている。これらのが、古事記編纂当時の新嘗の「豊楽」で実演されていたもので、古事記の物語はそれを濃厚に反映しているのだ。

仁徳記の「志都歌の歌返」六首⑥に「水石日売の嫁姫物語の中にある。その物語の発端は、大后豊楽したまにしても、御絹絹を採りに木のに幸しし間、天皇、八木田の若郷女に婚ひたまひ」というところにあった。集成本古事記西宮民氏は、『新嘗祭の酒宴』と解している「大后御絹絹を御船に積みて還り幸する時に、天皇の浮気を知って恨み怒る。その船に満載した御絹絹を全」とその段が「大后、豊楽したまはむと為、御絹絹を採りに、木のに幸でましし間に、『雲々』と語り出されているのだが。ここでは西郷信綱『古事記注釈』の解釈があがる。西郷氏はこの段につき、これもやはり饗宴にさき出し演出されていたものではないかという。この段が「大后、豊楽したまはむと為、御絹絹を採りに、木のに幸でましし間に、『雲々』と語り出され、ものであったらしいことを、すでに暗示する。」としての歌詞の中に「燕が下に、生ひ立てる。葉広、ゆつ真椿、其が葉の広り坐は大斎つ真椿。其の花は、照り坐し、其が葉の広り坐は大広し。その花、照り坐、高光る、日の御子に。『雲々』と類似しておあり、『椿の花は春のこととされ、その盛りはほぼ新嘗祭のころと致する』という。つまり、この『志都歌の歌返』六首は新嘗の『豊楽』で実際に演じられていたとみてあるさまが古事記中に取り込まれているのだ。なお西郷氏があ
同じ場所で、記紀歌謡と古代の饗宴との深い関係について
予想するより遥かに歌謡のゆたかな淵源であり、それが古事記
でも大きな役を果たしているのを忘れないべきではない。
「知之歌詠は口承歌であったとよくいわれるけれど、どういう
場でどのように歌われたかを考えみてばならない」

「志都歌の歌舞」という、もう一首（⑤）は、「枯野の琴」
の歌である。急足の河のほとりの大樹を切って作られた枯野という名
の船は朝夕日川の鳳水を宮廷に運び、「大御水に奉仕した。

発端は、ある時に天皇が「豊楽したまのはむ」として、「日女島に
出かけたというところにあった。雁の卵をあけて歌詠を
行った後、建内宿禰は戒を経て、「がを祝にや、つひに
・この歌は「本岐歌の片歌」であるという。本岐歌は春祝
の歌の義である。この「雁の卵」と「枯野の琴」の時は、天

古事記の「志都歌」や「志都歌の歌舞」が新嘗の「豊楽」
で歌われていたものであったから、するのも、記紀歌詠
の歌舞の後に、この歌舞が再び奏せられたもので、と短
い言及があるように、両者は同じ時期に歌われていたの
だ。だからこそこれらの名があり、だからこそ琴歌詠で新
嘗会の歌として「茲都歌・歌舞」と続いて歌われている。ま
す雄略天皇ゆかりの「茲都歌」が歌われ、それに仁徳天皇ゆ

以上のように、古事記の「志都歌」や「志都歌の歌舞」
が新嘗の「豊楽」で歌われたらしい。同

の歌詠をととなえている。この枯野の話の前に、
雁の卵の祥瑞をめぐる天皇と建內宿禰の歌詠がある。そこで
発端は、ある時に天皇が「豊楽したまのはむ」として、「日女島に
出かけたというところにあった。雁の卵をあけて歌詠を
行った後、建内宿禰は戒を経て、「がを祝にや、つひに
知る」。この歌は「本岐歌の片歌」であるという。本岐歌は春祝
の歌の義である。この「雁の卵」と「枯野の琴」の時は、天

古事記の「志都歌」や「志都歌の歌舞」が新嘗の「豊楽」
で歌われていたものであったから、するのも、記紀歌詠
の歌舞の後に、この歌舞が再び奏せられたもので、と短
い言及があるように、両者は同じ時期に歌われていたの
だ。だからこそこれらの名があり、だからこそ琴歌詠で新
嘗会の歌として「茲都歌・歌舞」と続いて歌われている。ま
す雄略天皇ゆかりの「茲都歌」が歌われ、それに仁徳天皇ゆ
「志都歌の歌返」が合わさっただろ。両者は音楽的にお響きあった。それぞれの歌群の実演や歌どうしの響き
あいの中には、彼らの熱狂や陶酔がともなったにちがいない。

琴語は後世のものであるにもかかわらず、『琴語』「歌返」両曲に特徴的にみられる後半部の執拗なリフレイン、しかも音楽的な対応を示しているので、それをふんいきの一部を伝えているだろう。

一見離れた位置の関係のようにみえる古事記と琴歌の
「しず歌」「しず歌の歌返」は、以上ののような説解から導かれ
るように、実は両者の寄接な関係と歴史とを示しているので。

そこには不変と変遷の両面が認められる。変遷というのは、
宮廷歌謡として長く行われ続けたという点である。古代の数
ある宫廷歌謡の中でも、収穫にまつわる新嘗祭こそは最も重視
された。「しず歌」と「しず歌の歌返」が組曲として宮中の新嘗祭の
宴で伝統として長く行われ続けたという点である。

歌謡物語全体は演じられず、それはだいぶ背景に後退していた
ものである。琴歌語編纂者達は両曲の縁記について、それぞれ雄略
や仁徳とは別の天皇代の縁記を説に云く「古事記の雲く
などとして書き留めている。これなども後世においては、
物語の現場の開かれて後の実演の情景を想わせる。しかしそれ
から百年以上隔たった時代には、それぞれ一曲ずつしか行われ
なくなったのでは。伝承が断絶した背景を示す「しず歌」の
歌謡物語全体の衰退の過程で「しず歌」の歌返がもとの物語と寄接ではなくなったりつつあった証拠の一つとみ
られよう。

もと楽府が管掌されていたこの両曲を含む大歌、聖武朝
ごろには「歌聿」に引き継がれ、その時代に合う琴歌をし
ごろは「歌聿」に引き継がれたらしい。またそれが、八世紀後半には「大歌所」
に引き継がれたらしい。もと楽府の伝統として行われてきた「しず
歌」も「しず歌の歌返」は、琴歌語に見るように一筆書き
されないことがいわれる。
小抄

三二人の天皇、歌曲の名義

古事記では「志都歌」が雄略天皇ゆかりの歌、『志都歌略』も
略記も天皇の倭の国の支配者としての権威を示すことを多く
収め、歌詠語が豊富である。記紀編纂の中天武朝から奈良
時代の初めにかけての人々は、両天皇を現国家の基礎を築い
た存在として重んじ、また親しもしていたようである。

「しつ歌」は、新嘗祭の直前でそのよ
うな両天皇を想起させただろう。古事記編纂中、雄
略と赤猪子の物語が数首の歌をもって演じられ
続いて仁徳
酒宴の場で、雄略と赤猪子の歌詠語の贈答などはもちろ
かい物語として俳句を誘ったのかもしれない。

仁徳と石之姫の物語がやはり数首の歌をもって歌い返され
るだろう。それによって直会の人々は自らの一つ、いや二
つの始原に立ち帰った。熱狂や音楽がともなっていたはすである。

「しつ歌」は、新嘗祭を響け、天皇を喜ぶ
に立ちつと、異を共食し、天皇を更新するという新嘗祭の意義
を考え、そして讃仰ということに、「しつ歌」を歌う歌返
を奏する主要な意義があったのでないだろう。それは新
祭を響け、天皇を喜ぶ
に立ちつと、異を共食し、天皇を更新するという新嘗祭の意義
を考え、そして讃仰ということに、「しつ歌」を歌う歌返
を奏する主要な意義があったのでないだろう。それは新
祭を響け、天皇を喜ぶ
野遊びにおける求婚歌であって引田部赤猪子の話に似た。
磐姫皇后の天皇を思慕して癒ふるする連作四首は古事記の妖女物語の裏面である。それらの歌が「しつう歌」や「しつう歌の返」という方薬を歌で繰り返されて「しつう歌」「しつう歌の歌返」とこの方薬を歌で繰り返される。「しつう歌」は、古事記伝で宣長は「志都歌」の「都は清音であり、「しつう歌」の語義についてふれておこう。

古事記伝で宣長は「志都歌」の「都は清音であり、「しつう歌」の一にそれ以前から九世紀にかけて宫廷の酒宴特別に新賞の酒宴で長く連綿と歌い継がれてきた歌だろう。それらは組曲と琴歌譜にみえる。それらのあり方は、以上のようなることから推定できる。論の縦縦を避けるために後回しにしたが、終わりに「しつう歌」の歌返しに繰り返すが、「しつう歌」の歌返しは七世紀、あるいはそれ以前から九世紀にかけて宫廷の酒宴特別に新賞の酒宴で長く連綿と歌い継がれてきた歌だろう。それらは組曲と琴歌譜にみえる。それらのあり方は、以上のようなることから推定できる。論の縦縦を避けるために後回しにしたが、終わりに「しつう歌」の歌返しに繰り返すが、「しつう歌」の歌返しは七世紀、あるいはそれ以前から九世紀にかけて宫廷の酒宴特別に新賞の酒宴で長く連綿と歌い継がれてきた歌だろう。それらは組曲と琴歌譜にみえる。それらのあり方は、以上のようなることから推定できる。
古事記の歌、または「篠音歌」のとおりに当たり、それは共通するものがある。そこで古事記の歌を読むために時琴歌譜を参照でき、それがかりでなく、琴歌譜から古事記を見ることもできる。琴歌譜の歌詩は節会の歌謡として奏されることが明らかであり、また歌い方を記す歌謡やわずかながらも琴譜も記しているからである。

「篠音歌」の歌い方は古代の宮廷行事にともなう酒宴で行われた宮廷歌謡の太い流れを示している。古事記が継続する他の「酒楽の歌」「志賀良歌」「宇岐歌」などもまた宮中の酒宴の場で長く歌い継がれた歌々であり、その歌詞の背後には古代の宮廷人たちの盛んな歓楽の声が響いている。

1. 濱部和雄『篠音歌論』（美術出版、昭和八年十月）
2. 拘義『琴歌譜の成立過程』（百楽、昭和三年十一月）
（3）林謙三『琴歌謡の音楽的解釈の試み』（雅楽―古楽謡の解

（4）益田勝実『記紀歌謡』（「四ページ」（九七二九年）

（5）文脈はやや異なるが、渡部和雄『志都歌の伝承』（国語国

（6）参考、川端善明『活用の研究II』（四四ページ）（九七九

（7）注（1）の論文にも名義の検討があり、鎮魂歌の義と説い

（8）琴歌謡の時代において新嘗会両曲を奏ずる意義について

（9）同趣旨の考察は、注（5）の論文にもみられる。